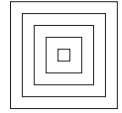


古機巡礼
二進伝心

平成 22 年度情報処理技術遺産および分散コンピュータ博物館認定式

旭 寛治

(株) 日立技術情報サービス



情報処理学会歴史特別委員会では、平成 20 年度から毎年、情報処理技術遺産および分散コンピュータ博物館の認定を行っている^{1), 2)}。3 回目となる今年は、昨年と同様、全国大会のイベント「私の詩と真実」のセッションの冒頭で認定式を行った。いつものように、情報処理技術遺産には認定証を記載した盾を、また分散コンピュータ博物館には認定書とプレートを、それぞれ関係者に贈呈した。

大会初日の 3 月 2 日に開催された本セッション全体のプログラムは次のとおりである。

- 09:30 開会
- 09:30 ~ 09:35 情報処理学会会長挨拶
- 09:35 ~ 09:45 選定基準概要の紹介と選定経緯の報告
- 09:45 ~ 10:00 認定証授与式
- 10:00 ~ 10:20 休憩
- 以降、詩と真実
- 10:20 ~ 11:20 講演「設計地獄から設計天国へ—回路設計自動化の夢を追って (Meine Dichtung) 計算機を創り CAD の門を開く (und Wahrheit)—」
創価大学名誉教授 渡部 和

11:20 ~ 11:30 休憩

11:30 ~ 12:30 講演「変化の時代に求められる情報教育」東京工科大学理事 相磯秀夫

会場では TK-80 と Lkit-16 の実物が展示された。

私の詩と真実

セッションのタイトル「私の詩と真実」の由来については、これまできちんと説明されたことはなかったが、今回司会の和田英一委員からたまたま説明があったのに続いて、2 人の講演者からもそれぞれ言及があった。言うまでもなく、これはゲーテの自叙伝“Dichtung und Wahrheit” (詩と真実) からきている。和田委員の発案であり、パイオニアの方々に若き日の夢 (詩) とその後の現実 (真実) についてご自身の体験を中心に語っていただくという本企画にピッタリのネーミングだと思う。

ついでながら、この連載のタイトル「古機巡礼 / 二進伝心」も和田委員のネーミングだ。情報処理技術遺産とオーラルヒストリーをうまく表している。



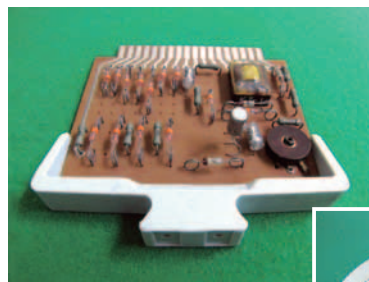
認定式の様子 (写真右: 白鳥会長, 左: KT-1 の所有者, 九州大学の代表者)



KT-1 の認定証



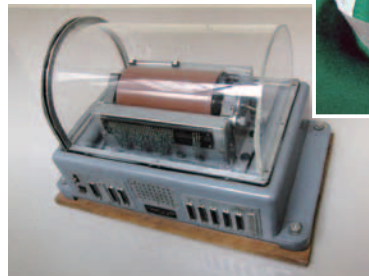
「私の詩と真実」講演者 渡部 和氏(左)と相磯秀夫氏(右)



KT-1 論理パッケージ



KT-1 で使用した紙テープ



KT-1 磁気ドラム



14-B



CS-10A



NEAC-2206

情報処理技術遺産

平成 22 年度として認定された情報処理技術遺産は次の 9 件である。今回はソフトウェア関係のものは認定に相応しい候補がなかった。

- 翻訳実験用計算機 KT-1 論理パッケージ, 磁気ドラム (KT-1 は我が国初の日・英・独 3 カ国語相互翻訳実験のために九州大学が 1950 年代後半に開発した言語処理用計算機。論理回路はトランジスタ使用, 記憶装置は容量 10 万ビット, 12,000 回転/分の磁気ドラム)
- 14-B (カシオ計算機が創業の機械である 14-A に続いて開発したリレー式計算機。1959 年製造。現在でも稼働するようメンテナンスされている。
- NEAC-2206 (日本電気が開発した大型汎用電子計算システム。1963 年に大阪大学が導入。2009 年に同大学から京都コンピュータ学院に寄贈された。計算機本体のほか, 磁気テープ装置や紙テープさん孔機などを含めたシステムとして保存されている)
- CS-10A (早川電機(現・シャープ)が 1964 年に発売した世界初のオールトランジスタ・ダイオードによる電子式卓上計算機。定価の 53 万 5 千円は当時の大衆的な乗用車とほぼ同じ値段であった。電卓の先駆けとして, その後の小型化や普及に道を拓いた)



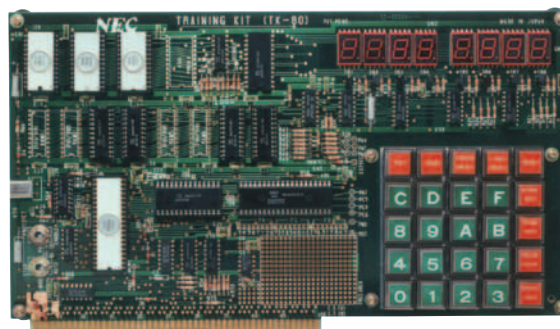
USAC-3010



HITAC 8700



FACOM 230-25 システム一式



TK-80



PANAFACOM Lkit-16

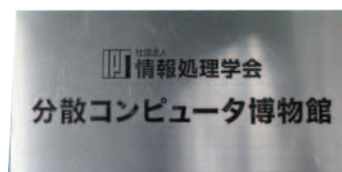
- **USAC-3010** (ウノケ電子 (現・PFU) が開発した中小企業向けトランジスタ式小型コンピュータ。1号機の出荷された1962年当時はまだ試用段階であったコアメモリを採用。低価格や使いやすさを追求したオフコンの源流となった計算機の1つ)
- **FACOM 230-25 システム一式** (富士通の汎用中型機。1973年製造。日本におけるコンピュータの本格的導入期を代表する計算機の1つ。本体のほか、磁気テープ装置やラインプリンタ等の周辺装置から自動電圧調整装置までのシステム一式が実際の業務用の構成で保存されている)
- **HITAC 8700** (日立製作所が開発した国産初の32ビット仮想アドレス方式、主記憶共有マルチプロセッサ、バッファ記憶方式、高度の機密保護方式

を特徴とする汎用大型計算機。1973年製造。ちなみに、本機のOSはOS7と呼ばれ、当時の最先端の機能を備えていた。筆者も開発に携わったことが懐かしく思い出される)

- **TK-80** (1976年に日本電気から発売された8ビットマイコンのトレーニングキット。インテル8080互換のチップを備え、機械語でのプログラミングと実行が可能。その後のパーソナル・コンピュータの先駆けとなった製品)
- **PANAFACOM Lkit-16** (我が国初の1チップ16ビットマイクロコンピュータの普及を図るために1977年に発売された学習キット。パナファコム (現・PFU) が開発したチップを内蔵。エンジニアから一般のマニアに至るまで、コンピュータ知識の普及拡大に貢献)



JAIST 情報科学研究科



分散コンピュータ博物館プレート



当日展示された PANAFACOM Lkit-16 と TK-80



情報処理技術遺産パンフレット

分散コンピュータ博物館

平成 22 年度として認定されたのは次の 1 件のみである。

- 北陸先端科学技術大学院大学 JAIST 記号処理計算機コレクション (1980 年代に NTT が開発した LISP マシン ELIS など記号処理計算機約 20 台のコレクション。一部の機器については動態展示も試みられている。ELIS については、会誌に掲載された解説記事³⁾がコンピュータ博物館 (<http://museum.ipsj.or.jp/>) の「ライブラリ」にアップされている)

おわりに

歴史特別委員会では、毎年パンフレット「情報処理技術遺産」(写真)を発行している。これまでに認

定された機器や博物館が紹介されている。また、コンピュータ博物館にも同様の内容が掲載されているのでご覧いただきたい。

参考文献

- 1) 和田英一：情報処理技術遺産および分散コンピュータ博物館認定式，情報処理，Vol.50，No.5，pp.369-374 (May 2009)。
- 2) 和田英一：平成 21 年度情報処理技術遺産および分散コンピュータ博物館認定式，情報処理，Vol.51，No.5，pp.593-596 (May 2010)。
- 3) 日比野靖：通研 ELIS，情報処理，Vol.43，No.2，pp.118-120 (Feb. 2002)。

(平成 23 年 3 月 7 日受付)

旭 寛治 (正会員) asahi@fw.ipsj.or.jp

1971 年東京大学工学部卒業。同年 (株) 日立製作所入社。同社基本ソフトウェア本部長，(株) 日立テクニカルコミュニケーションズ代表取締役等を歴任。1999 年本会理事，2005 年副会長。歴史特別委員会委員。コンピュータ博物館実行小委員会主査。本会フェロー。